

## 第3学年国語科指導案

日 時 平成27年11月6日(金) 5校時  
 学 級 3年A組 男子10名 女子18名 計28名  
 授業者 教諭 今野満江

### 1 単元名・教材名

いにしへの心と語らう・夏草―「おくのほそ道」から

### 2 単元について

#### (1) 教材について

「おくのほそ道」は芭蕉が訪れた土地で詠んだ俳句が書かれた紀行文である。芭蕉はみちのくを旅しながらその土地の美しい風景や人々に出会い、その感動をもとに「おくのほそ道」を残した。芭蕉の句だけでなく、地の文の内容を深く読み取ることによって句の解釈や鑑賞が深まり、さらに芭蕉のものの見方や考え方まで読むことができる。文章は漢語を多く用いた漢語調ではあるが、対句表現や数字を使って具体的にイメージできるようになっている。俳句が書かれている前の地の文や芭蕉の旅に対する思いをじっくりと読むことによって、芭蕉がその土地でどんなことを感じ、考えたか、芭蕉の思いに寄り添わせることで深みのある作品となっているということを読み取らせたい。

#### (2) 生徒について

県学調の結果(県比1年96.9、2年102.0)を見ると、国語の力は向上傾向にある。しかし、領域別に見ると、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項が2年生では県学調県比-2.2ポイント、3年生では全国学調+3.1ポイントとなっており、他の領域に比べて低い。今まで古典について学習してきたが、音読を楽しんでいる生徒は少なく、アンケートをとって見ても「古典を勉強するのはとても楽しい」「どちらかというとなじみがある」と答えた生徒は48%と多くない。さらに、語彙の理解が不足しているために、文章を読んでストーリーや事実を読み取ることはできても、文章に表れているものの見方や考え方まで自力で読み取ることが苦手で、教師主導の授業になっていることが多い。授業では素直に話を聞いているが受動的で自ら文章を読んで自分の考えをもつことに消極的である。相手の話を聞こうとする姿勢はあるのだが、互いの意見に対して質問や意見を出しながら考えを深めようとする意欲に欠けている。対話の場面でも深く考えずに相手の考えを肯定してしまい、結局のところ自分の考えがまともにならないでしまうことも多い。自分の考えや根拠があいまいなままで対話を進めても、互いの考えの違いを認め合ったり、反論したりすることができず、目標とするさらに深い考えや読みまで到達できないことがあり、「読み味わう」ことや「理解を深める」ということを苦手としている。

#### (3) 指導について

本教材で生徒達につけたい力を文章に書き表されているものの見方や考え方をとらえ、それについて自分の考えをもつこと(「読むこと」エ)と、昔の人の生活や社会などを想像して読み、現代との共通点や学ぶべき点に気づくこと(伝・国(1)ア(ア))とした。生徒の実態から、個人で文章に書き表されている作者のものの見方や考え方の理解を深めることは難しい。そこで、授業の中でペアやグループでの対話を意図的に設け、自分の考えを他の考えと比較させることで、自分の考えの根拠を明確にしつつ、考えを深めさせたいと考えた。ただ、そのためには生徒一人ひとりの考えやその根拠が異ならなければ考えを広め、深めるための対話の意味をなさない。そこで、教科書本文にある叙述だけでなく、芭蕉がその句や文章を書くに至った経緯や人生観、他の作品など根拠になりうるものを多くすることで他との考えや根拠の違いを出させ、それを聞き合ったり質問し合っ

たり、時に反論させたりする場面を設けることで、より他から学ぼう、自ら知ろうという意欲が高まるのではないかと考えた。

また、研究との関わりから、対話をさせる場合には、「対話のゴール」を明確にすることと、司会者指導、対話をすることでどんな変容や深まりがあったかを認識させることを意識して行ってきた。一つに考えをまとめる協議なのか、たくさんの考えを出させる討論なのかを明確に指示し、学習の振り返りではターニングポイント（自分の考えが深まったり変容したりしたきっかけ）を書かせることで対話の意義を自覚させたい。

これらをふまえ、本教材では歴史的背景や作者の人物像や人生観について事前に調査をさせた上での対話によって考えを深める時間とそれをもとにして「おくのほそ道」という作品の魅力を考える時間を設定し、旅に寄せる芭蕉のものの見方や考え方に対する理解を深め、芭蕉の生き方について自分の考えをもちながら読めるようにさせたいと考えた。

### 3 教材の指導目標

- (1) 古典に書かれたものの見方や考え方に興味をもち、作者のものの見方や考え方について自分の考えをもち、交流させながら深めようとしている。(関心・意欲・態度)
- (2) 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつことができる。(読むこと エ)
- (3) 歴史的背景や作者の人生観をふまえて古典を読み、現代との共通点や学ぶべき点に気づくことができる。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1) ア (ア))

### 4 教材の指導計画及び評価規準

時	主たる学習活動	評価規準 (評価の観点：評価方法)	指導上の留意点
1	○「おくのほそ道」の概略をとらえ、学習の見通しをもつ。 ○全文を音読し、「2平泉」の大意をつかむ。	・作品に関心をもち、作品の表現の特徴に注意して積極的に音読しようとしている。(関意態：観察) ・現代語訳や脚注を参考に、内容を理解している。(読：ワークシート、観察)	・平泉での研修を想起させ、関心をもたせる。 ・原文は、つかえずに読めるようになるまで、繰り返し音読させる。
2	○「1」に書かれている芭蕉の旅への思いを読む。	・「1」を読んで芭蕉の旅に対するものの見方や考え方について理解を深めている。(読：ワークシート、観察)	・資料を使って当時の旅の様子を理解させる。 ・「旅」に対する芭蕉の思いに焦点をあてて読ませる。
3	○平泉での芭蕉の思いを予想する。 ○思いに迫るための調査を行い、結果を根拠にした自分の考えをもつ。	・作品に関わる歴史的な事実や作者の人物像などについて、意欲的に調べ、まとめようとしている。(関意態：観察)	・関連する資料を用いてグループ毎に調査させてまとめる。 ・グループで調査したことを根拠にして芭蕉の思いについて自分の考えを書かせる。
4 本時	○平泉で芭蕉がどんなことを感じていたのかを読み取る。	・歴史的背景や作者の人生観をふまえ、芭蕉のものの見方や考え方を理解し、他と交流させながら自分の考えをまとめている。(読：ワークシート、観察)	・調査したグループとメンバーを変え、説明させたり考えを交流させたりする。 ・芭蕉の人物像を読み解きながら、平泉でどんな情景を想像したのかを考えさせる。
5	○「おくのほそ道」の魅力をまとめる。	・歴史的背景や芭蕉の人生観をふまえて古典を読み、現代との共通点や学ぶべき点に気づくことができる。(言：ワークシート)	・前時まで読んでいたことをもとにして、今も読み継がれている魅力を考えさせる。

## 国語3

### 5 本時の指導

#### (1) 本時の目標

- ・ 歴史的背景や作者の人生観をふまえて「2 平泉」を読み、芭蕉のものの見方や考え方を理解し、考えを交流させながら自分の考えを深めることができる。

#### (2) 研究とのかかわり

- ・ 事前に司会者と対話を深めるための進め方を打ち合わせておく。
- ・ 対話のテーマ（「なぜ芭蕉は涙を流したのか。」）とゴール（「調査したことを根拠にして様々な考えを引き出す」）を明確にする。
- ・ 生徒の考えや根拠を広げるために、調査項目の異なるグループで対話をする場を位置づける。
- ・ 振り返りとして、対話による自分の考えの変容や深まりを書かせる。

(3) 本時の展開

段階	学習活動	教師の支援と留意点	形態	評価の観点【】と方法① 教材教具②
導入 (8分)	1 学習課題を確認する。  芭蕉はなぜ涙を流したのだろうか。	・「2 平泉」の部分を音読し、課題に関わる部分を再確認する。	一斉	○前時にまとめた各グループのプリント
	2 学習の見通しをもつ。	・前時でまとめた資料を確認し、1時間の流れを紙板書で整理する。		
展開 (37分)	3 資料をもとに、芭蕉がなぜ涙を流したのかをグループ毎に討論する。	【他者との対話】 ・前時に書いた自分の考えと根拠をもとにして、芭蕉の思いを考えさせる。 ・調査グループとはメンバーを変えて対話させる。 ・各グループで調査した内容は事前に読ませる。 個人の考えの発表後、根拠の違いに注目し、質問させるように事前に伝えておく。 ・討論なので、思いの裏づけとなる根拠をたくさん出させる。	グループ	○ ボード ○ 地図 写真
	4 討論の結果を発表し、さらに芭蕉の思いを深く考える。	・全グループに発表させる。思いは大差ない意見が出ると思われるので、前のグループが発表した思いの根拠と重ならないように発表させる。 ・あてはまらないものが無いかを考えさせる。	一斉	【読む能力】 歴史的背景や作者の人生観をふまえて「2」を読み、芭蕉のものの見方や考え方を理解したうえで、考えを交流し、自分の考えを深めている。(ワークシート)
	5 発表を聞いて、自分の考えをまとめ、発表する。	【自己との対話】 ・一番強いと感じた思いとそう考えた根拠を明確して、ワークシートに自分の考えを書かせる。	個人	
6 芭蕉の中尊寺での句を読み、芭蕉の思いに触れる。	【教材との対話】 ・高館での思いとは違うことを簡単におさえ、次時の課題へとつなげる。			
終末 (5分)	7 学習を振り返る。	・前時に行った予想との変化やターニングポイントを意識させ、背景を読むことのおもしろさや対話による読みの深まりを自覚させる。	個人	